

総説

安全、健康、ウェルビーイング

明治大学 顧問 名誉教授
公益社団法人日本保安用品協会 特別会員
公益財団法人鉄道総合技術研究所 会長
一般社団法人セーフティグローバル推進機構 会長 向殿 政男

1. まえがき

最近よく聞く「ウェルビーイング」とは、どのような考え方ののだろうか。このことについて考察した後、これからの労働安全衛生において、極めて重要な指針となるに違いない「安全、健康、ウェルビーイング」の活動について紹介する。

働く人の安全、健康、ウェルビーイングの向上を目指すことは、これまでの主として怪我をしない、病気をしない等のネガティブ（マイナス）の面（領域）に目を向けていた労働安全衛生活動を、明るく前向きに安心して仕事をするといったポジティブ（プラス）の面（領域）に向かわせることになる。これは、働く人の幸せ、すなわち生きがい、遣りがいに結び付く。それだけではない、企業の経営トップは、労働安全衛生に対して、コスト意識から投資への意識変革を促せられ、企業のウェルビーイング化を通して社会のウェルビーイングに貢献するという新しい時代の経営目的を見出すことに気付かされる。

2. ウェルビーイング (Well-being) とは

「ウェルビーイング」という言葉が、企業経営を中心に、最近、新聞や雑誌紙上でよく見かけるようになってきた。ウェルビーイングに対応する日本語はないようで、幸せ、幸福、健康、福利、福祉、等々、状況によって訳し分けられている。欧米では一般に用いられている言葉に対して、対応する日本語が存在しないということは、説明を受ければ理解

できるが、その言葉の意味に対する概念が、日本には存在しなかったことを意味している。逆の立場であるが、丁度、日本では、誰でも日常で使っている「安心」という言葉に相当する英語が、欧米には存在しなかったのに似ている。

ウェルビーイングとは、本来、Well（良く）、Being（存在する・生存する・生きる）ことを意味していて、歴史的には欧州で古くから用いられていたようである。現在、我が国では、通常、**図表1**のような意味として、解釈されているようである。

図表1 ウェルビーイングの定義の例

ウェルビーイング (Well-being)
個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念（厚生労働省：雇用政策研究会報告書より）

一方、心理学では、古くから「幸福」に関連して、ウェルビーイングに関する研究が多く行われて来ており、多数の分類や定義がなされている。奥深い、種々の研究が行われ、提案されているが、ここではその内容について紹介するゆとりはない。一例として、**図表2**のような分類と定義を紹介しよう。

心理学者からは、今更どうしてウェルビーイングなんだと言われそうだが、我々のまわりで、最近ウェルビーイングという言葉が頻繁に用いられだした理由には、大きく分けて二つの流れがあると思われる。一つは、1946年の世界保健機関（WHO）の設立時の憲章

図表2 ウェルビーイングの種類例

医学的 ウェルビーイング	心身ともに病気でなく、機能障害がない状態のウェルビーイング
主観的 ウェルビーイング	人間心理における快楽に関するウェルビーイング
心理的 ウェルビーイング (持続的 ウェルビーイング)	心身の潜在能力の発揮、人生の意義、遣りがいの発見としてのウェルビーイング

の中で宣言されている健康の定義にある。ここでは、「健康とは、ただ単に病気ではないとか、虚弱でないというだけでなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、完全にウェルビーイング (Well-being) な状態にあることをいう。」となっている。ここにウェルビーイングという表現が使われていて、健康の説明にウェルビーイングが用いられている。図表1のウェルビーイングの定義は、この流れに沿ったものと考えられる。

もう一つの流れは、最近の労働安全衛生の分野における、ビジョン・ゼロ (Vision Zero) 活動^{(1),(2),(3)}がある。その主要なテーマに「安全、健康、ウェルビーイング」が掲げられている(図表3)。ここには、安全 (Safety)、健康 (Health) と共に、ウェルビーイング (Well-being) が表明されている。労



図表3 ビジョン・ゼロ

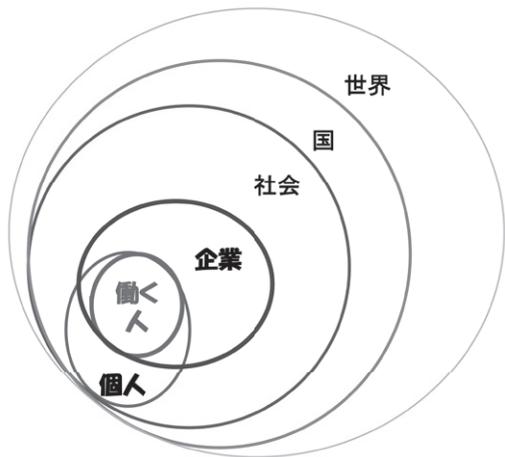
働安全衛生におけるこのビジョン・ゼロの活動は、ウェルビーイングを心理学の心に関する狭い研究分野から、人間の肉体、精神を含めた広い分野に開放したものと考えられている。今後のウェルビーイングの研究、活動は、この方向と考え方になると筆者は考えている。

3. ウェルビーイングの包含関係

ウェルビーイングの本来の目的は、人間の幸せの実現にある。従って、ウェルビーイングの研究は、個々の人々の心の在り方を対象として、心理学で取り扱う課題であることは自然である。一方、社会全体のウェルビーイングというものも考え得る。社会のウェルビーイングとは、社会で生活している人々の幸せを保証するための政治、経済、教育等の体制、組織、制度、習慣、文化、社会インフラ等の在り方のことであろう。

個人と社会ウェルビーイングの間に、企業のウェルビーイングもあると考えられる。企業のウェルビーイングとは、企業が働く人の幸せ、顧客の幸せを実現させて、社会のウェルビーイングの実現に貢献することをいう。企業がウェルビーイングを唱えて、社会のウェルビーイングの向上に貢献することは、SDGsを唱えて世界の未解決問題の解決に貢献するのと同様に、極めて望ましいことである(ただし、御題目だけにならないように、実質的に貢献する道を歩むことが重要である)。

ここで、職場で働く人のウェルビーイングを考えてみよう。これは、企業のウェルビーイングの一環と考えられる。企業が従業員のウェルビーイングを考える理由は、働く人の意欲が高まれば、生産性が上がり、利益の増大につながると思っているからかもしれない。しかし、利潤の増大のために、働く人のウェルビーイングを高めるといふ順番には違和感を覚える。まず、従業員の幸せの実現を目指すウェルビーイングがあって、その結果として、企業の利潤が上がるのであって、その逆



図表4 ウェルビーイングの包含関係

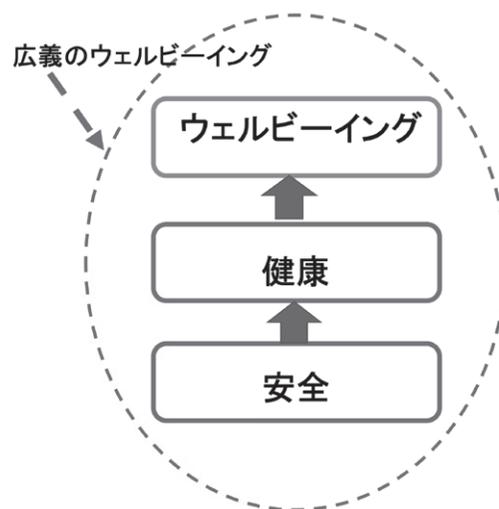
ではないはずである。少なくとも両者の両立を同時に考えるべきである。こう考えると、企業のウェルビーイングの基本は、働く人のウェルビーイングである。以上の各種のウェルビーイングの包含関係は、図表4のように表せるだろう。

4. 安全、健康、ウェルビーイング

ここで、労働安全衛生におけるウェルビーイングの位置づけを考えてみよう。職場で働く人は、自宅へ帰れば一般市民でもある。地球上で働く人とその家族を考えれば、少なくとも人類の半分以上は、働く人とその関係者であるに違いない。一般の人々のウェルビーイングを考えるよりは、的を絞って働く人のウェルビーイングを考えることは、大いに意味のあることであり、労働安全衛生に携わる我々の役割でもある。これまでのウェルビーイングは、「心」の健全性を問題にしている。しかし、働く人にとっては、その前に、もっと大事なことがある。丈夫な肉体と健全な精神、すなわち、体や精神の健全を持つことである。これは「健康」の問題である（ここでの健康には、病気等の身体的なものはもちろんのこと、神経を病む精神的な病気を含んでいる）。しかし、前項で考察したように、身体、精神、心の健全性の前に、まず、ケガを

しない、労働災害で死なない等の肉体的な「安全」の確保が大前提となっている。ここで言いたいことは、労働安全衛生におけるウェルビーイングの位置づけは、まず、安全が基本にあつて、更に健康が確保されていて、その上でのウェルビーイングという関係にあることである。労働安全衛生におけるウェルビーイングを考えることは、安全、健康、ウェルビーイングという三者を一体として検討する必要があることを意味している。労働安全衛生では、人間の本質である身体、精神、心の三つを同時に対象としなければならない。そこには、大枠ではあるが、重要さの順番があつて、安全→健康→ウェルビーイングの順であることを主張したい（図表5）。

筆者は、従来の「心」を対象にしてきたウェルビーイングに対して、安全、健康、ウェルビーイングをひとまとめにして「広義のウェルビーイング」と呼びたいと考えている。私たち労働安全衛生の世界でこれから大事にすべきは、広義のウェルビーイングであると考えている。これまでの労働安全衛生では、安全、健康までは目標に入れていたが、今後は、残されている領域、すなわち人間の心の在り方を問題とする狭義のウェルビーイングの向上に努力すべき時代に入ったと考えられる。



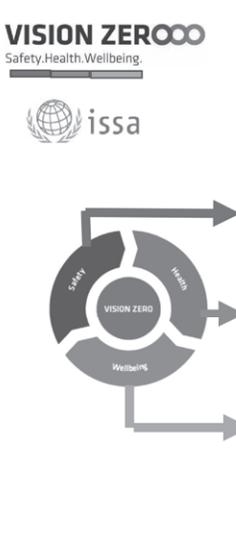
図表5 安全、健康、ウェルビーイングの順番

ここで、改めて、これまでの労働安全衛生の活動の歴史を振り返ってみよう。これまでの労働安全衛生活動での主な目的は、労働災害防止、すなわち、職場での死亡事故、重傷事故、ケガ等をいかに減らすかであった。人間の身体、特に物理的な肉体に対する「安全」の確保である。そのための結果指標として、例えば、災害の度数率や強度率が用いられてきた（これまで死亡事故の多かった例えば製造業では、機械安全に基づく機械設備の安全化が進み、徐々にではあるが、大手企業を中心に改善されつつある。しかし、第3次産業における従業員の増加等で、ケガ等を含めて死傷者数は、最近、増加傾向にある）。次に、職場では、職業に起因する身体的な病気（疾病）の防止も大きな課題であった。この改善の努力は労働環境の整備につながり、関係者の長年の努力で労働現場の環境が整備されつつある。同時に、過重労働、ストレス等に起因する肉体的な病気や精神的障害が増加するようになった。これらをいかに減らすかが次の重要な課題になりだした。いわゆる「健康」の問題である。これらが働き方改革につながり、職場の働き方の改善に向けられた。この

ように、安全の次は、健康が大きな課題になった。次に、セクハラ等のメンタルの問題が浮き上がってきた。職場で、楽しく生きられない、明るい生活ができないという意味で、心の問題である。これこそが、「ウェルビーイング」につながる問題である。

以上、労働安全衛生を、安全、健康、ウェルビーイングという流れで簡単に見てきたが、ここでのマインド（考え方）は、働く人が、「身体的傷害がない」、「身体的病気、疾病がない」、「精神的障害がない」というように、「・・・がない」というネガティブの面を対象としていたとあってよい。主としてマイナスをゼロにする動きであった。これらは大変大事な視点であるが、これからの労働安全衛生は、この世界にとどまっていたはならないと筆者は、考えている。これまでの流れを、ここでは、労働安全衛生における旧概念と呼ぶことにする（図表6）。

それでは、労働安全衛生における新概念とは、どのようなものであろうか。これまでの視点を基礎として、更に前向きに、ポジティブ領域で向上させる方向にマインドを変えていく必要があると考えている。ゼロからプラ



	マイナスからゼロへ 旧概念（結果指標）	ゼロからプラスへ 新概念（前向き指標）
安全 (Safety)	身体的傷害がない	リスクからの解放、リスクを受け入れ、ベネフィットを求めて、自由に行動できる “安心して”
健康 (Health)	身体的病気、 疾病がない	心身共に健全 ②身体的にも、精神的にも、 社会的にも 良好な状態(WHO “元気で”
ウェル ビーイング (Well- being)	①(メンタル等)精神 的障害がない	③やりがい、生きがい、幸福 ⇒安心 “意欲的に”

図表6 安全、健康、ウェルビーイングの旧概念と新概念

スへ向かう努力である。

この新概念を**図表 6**に従って、説明してみよう。新概念においては、「安全」とは、機械設備の安全化が施されていてリスクが許容可能な状態になっており、作業者はその小さなリスクは受け入れた上で、リスクから解放されて、自由に安心して働ける、こういう前向きな状態のことをいうこととしたい。「健康」とは、WHOの定義に倣い、身体的にも、精神的にも、そして社会的にも良好な状態で、元気に働ける状態のことをいうことにしたい。そして、「ウェルビーイング」とは、遣りがいい、生きがいをもち、意欲的に仕事はできる状態のことを言いたい。これが筆者の提案する安全、健康、ウェルビーイングの意味である。正（ポジティブ）の領域でプラスに向かって、すなわちゼロからプラスに向かうのは、これからの労働安全衛生はあるべきであると考えている。

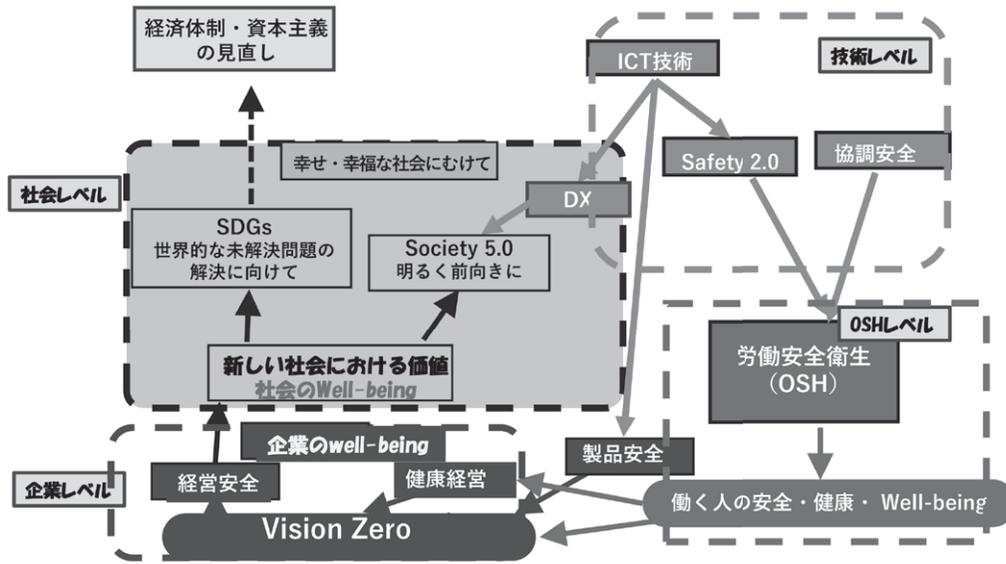
もちろん、これまでの負（ネガティブ）の領域でリスクを低減するという、マイナスをゼロにする考え方や活動は重要で、それをしっかりとやるのが前提であるが、いつまでもここにとどまっていたのでは、労働安全衛生活動は、日の目を見ないし、経営者から見てコストと意識され、本来は最も大事であるにもかかわらず、評価されない部署に閉じ込められる傾向になる。第一、事故につながった原因、危険なところを探して潰すというネガティブな領域だけではなく、上手く行った例、成功した例（日常活動ではほとんどがそうである）等のポジティブ領域の例を追求する方が、はるかに上手く行くというホルナゲルのSafety II⁽⁴⁾の考え方は重要である。最も大事なことは、働く人が、明るく、前向きに、生きがい、遣りがいいをもって仕事に従事することである。これが、企業の生産性の向上につながり、企業の発展につながり、経営者として目を向けるべき、重要な分野であると自覚させるようになるはずである。労働安全衛生は、本来はそのように企業の発展に資する経営に直結する重要な分野なのである。これ

まで経営者がなかなかそこに気が付かなくて、安全をコストと考えて、投資とは考えなかったのは、これまでの労働安全衛生がマイナスをゼロにする方向のみにとどまっていた傾向があったからではないだろうか。労働安全衛生が、本来のあるべき姿に戻すためには、ウェルビーイングが着目される今、ポジティブ領域でゼロからプラスに向かって旧概念から新概念に目を向けるべき絶好の時期ではないだろうか。

5. 労働安全衛生におけるウェルビーイングの位置づけ

企業のウェルビーイングの向上は、社会のウェルビーイングの実現に貢献するが、その基本は、企業におけるビジョン・ゼロ活動、すなわち、働く人の安全、健康、ウェルビーイングの実現にある。更に、その基本は、働く人の安全の確保から始まるはずである。働く人にとって、まず、自らの身の安全を確保し、その上で健康を維持し、更に、遣りがいい、生きがい（ウェルビーイング）をもって仕事に取り組める。それがひいては企業のウェルビーイングを通して企業価値向上につながる。この論理に間違いはないだろう。

これまで述べてきた労働安全衛生のウェルビーイングと企業のウェルビーイング等の関係を**図表 7**に示す。この図では、ICT（情報通信技術）が二つのルートで影響を及ぼしている。一つは、安全技術レベルでの貢献であるSafety2.0と協調安全⁽⁵⁾であり、もう一つは、社会レベルでのDX（デジタルトランスフォーメーション）での社会やビジネスモデルの変革である。この図は、Safety2.0などの技術レベルでの安全の確保がこれまでの労働安全衛生（OSH）のレベルを向上させ、働く人の安全、健康、ウェルビーイングを実現させる。このビジョン・ゼロ活動が、上に記したように企業のウェルビーイングを向上させ、企業が社会のウェルビーイングの向上に貢献する流れを示している⁽⁶⁾、⁽⁷⁾。



図表7 労働安全衛生におけるウェルビーイングの位置づけ

6. 第2回ビジョン・ゼロ・サミットが新しい労働安全衛生の世界を開く

最近の労働安全衛生分野での動向で注目されている活動として、前述のように、「安全、健康、ウェルビーイング」を掲げているビジョン・ゼロ (Vision Zero) 活動がある⁽¹⁾。この活動には、多くの国と大手企業が参加して、現在、世界的に展開されつつある。2019年にフィンランドのヘルシンキで第1回ビジョン・ゼロ・サミットが開催され、我が国からも多くの参加者があった。その会場で、第2回サミットを日本で開催することが提案され、国際労働機関 (ILO) の一つのサブ機関である「職場での安全と健康に関する世界連合 (Global Coalition for Safety & Health at Work)」が今後のビジョン・ゼロ・サミット主催することになり、第2回が2021年の日本での開催が決定された。しかし、世界的な新型コロナウイルス感染拡大のために、実際には1年延期されて2022年5月13日～15日に、すべてバーチャルで開催 (Web開催) された。我が国で開催されたこの第2回のビジョン・ゼロ・サミット⁽³⁾は、16のセッションで構成され、200名前後の講演者があって、画期的な会議となった。特

に、オープニングセッションでは、後藤厚生労働大臣やWHOのテドロス議長、石村産業総合研究所会長、井上清水建設社長等が挨拶された。我が国からの協賛機関は、産業総合研究所 (AIST) と労働安全衛生総合研究所 (JNIOOSH)、及び筆者が所属するセーフティグローバル推進機構 (IGSAP) の3機関であった。後援団体としても世界の労働安全衛生機関が名を連ねており、我が国からは、厚生労働省、経済産業省、及び中央労働災害防止協会、日本規格協会をはじめいくつかの機関が参加していた。興味のある方は、是非、ホームページですべての講演をオンデマンドで見ることができるので、視聴願いたい⁽³⁾。

第2回のビジョン・ゼロ・サミットが画期的であったと記した理由には、もう一つある。それは、我が国から提案された協調安全の理念が認知され、推進され出したことである。協調安全が国際電気標準会議 (IEC) の2020年の白書 (Safety in the future)⁽⁸⁾の中に取り上げられ、世界標準を目指す方向が示されていたが、このことが、このサミットの最後に出された東京宣言⁽⁹⁾にも織り込まれた。このように、ビジョン・ゼロの動きが

世界的な大きな潮流になってきているが、その中で、今回の第2回ビジョン・ゼロ・サミットを機会に我が国から新しい方向が提案されたことになる。これまでの労働安全衛生の活動は、負の領域でマイナスをゼロにすることを目標としてきたが、これからはそれに加えて正の領域でゼロをプラスにする方向に向かうべきことが提案された。そして、これからの労働安全衛生の活動は、これまでの安全の領域だけでなく、安全、健康、ウェルビーイングへと領域を広げ、心の在り方も含めてゼロをプラスにする方向に発展させるべきことが提案されたが、これからは、世界中で一緒になって、ネガティブの領域と共にポジティブの領域でもプラスの方向に向かうべき時代がやって来たといえる。このように、今後の労働安全衛生の向かうべき新しい方向が示された。これが今回のサミットが画期的であったと述べた二つ目の理由である。

なお、ビジョン・ゼロのロゴマークは、これまで図表3が用いられ、働く人のためのビジョン・ゼロを目指していたが、第2回ビジョン・ゼロ・サミットを契機に、図表8のロゴを用いて、すべての人のためのビジョン・ゼロを目指すことになった。そして、我が国は、ウェルビーイングに関してテクノロ



図表8 新しいビジョン・ゼロのロゴ

ジーの分野で貢献すべく、ウェルビーイング・テクノロジーを提案し始めている。

7. あとがき

本稿が掲載されているセイフティダイジェスト誌は、公益社団法人日本保安用品協会のオフィシャルな協会誌である。保安用品は、直接、働く人が身に付けて、自らの安全を確保する最も大事な用品である。その着用が、安全を確保しても健康を害してはならないのはもちろんであるが、着用することで、健康を増進することにつながるようにしたいものである。更にその先として、着用することで使い勝手がよく、愛着がわき、安心して、喜んで仕事ができるようになるのが望ましい。保安用品も、安全を確保して働く人の身を守るだけ時代から、健康を促進させ、ウェルビーイングを向上させることにつながることを望まれる時代に向かいつつある。

【参考文献】

- (1) 向殿政男、労働安全衛生の目指すべき方向とその世界的な動き～未来安全構想とビジョン・ゼロ活動～、セイフティダイジェスト、Vol.66, No.11 pp.2-7, 日本保安用品協会、2020-11
- (2) 向殿政男、労働安全衛生の新潮流「VISION ZERO」VISION ZERO SUMMIT JAPAN2022開催について、安全と健康、Vol.23, No.1, pp.95-97, 中央労働災害防止協会、2022-1
- (3) Vision Zero Summit 2022のホームページ <https://japan.visionzerosummits.com/>
- (4) E. Hollnagel (北村正晴・小松原明哲監訳)、Safety-I & Safety-II 安全マネジメントの過去と未来、海文堂、(2015)
- (5) 向殿政男、Safety2.0とはなにか？隔離の安全から協調安全へ、中央労働災害防止協会、2019-5
- (6) 向殿政男、北條理恵子、清水尚憲、安全四学－安善・安心・ウェルビーイングな社会の実現に向けて、日本規格協会、261ページ、2021-10
- (7) 向殿政男、知っておきたい安全衛生の世界的動向－働く人の安全、健康、ウェルビーイング－、中央労働災害防止協会、2022-10
- (8) IEC白書のURL <https://www.iec.ch/basecamp/safety-future>
- (9) 第2回ビジョン・ゼロ・サミット東京宣言のURL <https://japan.visionzerosummits.com/japan-2022/tokyo-declaration/>